**⒀　神の敵としての自由精神（『反キリスト者』の13）**

　「自由精神」とは「一切価値の価値転換」であり、「真と非真」というすべての古い概念への「身体的戦いの宣言そして勝利の宣言」である。「もっとも価値ある洞察」は、もっとも遅く発見される。それは「われわれの学あり方のあらゆる方法、あらゆる前提」であり、それは何千年にわたり「軽蔑」されてきた。そして、その「軽蔑」に基づき、われわれは「品の良い人々」から排除され、「神の敵」、「真理の軽蔑者」、「憑かれた者」とされてきたのである。すなわち、われわれは「真理とは何であるべきか」、「真理の奉仕者とはいかにあるべきか」という従来の考えに敵対してきた。そして、こういう態度が「品位のない軽蔑すべきもの」に思われてきたのである。[[1]](#endnote-1)

**⒁　もっとも病的動物（『反キリスト者』の14）**

　人間はもはや「純粋精神(der reine Geist)」や「神性(die Gottheit)」からは導き出せず、「動物」のもとへ引き戻される。ただ、人間は「もっとも狡猾な動物」であるがゆえに「もっとも強い動物」と考えられる。人間の「精神性」とはその帰結であり、「創造の王冠」ではない。すべての存在者は人間と並んで「完全性の同じ段階」にある。人間は、相対的に考えると、「もっとも出来損ないの動物」、「もっとも病的な動物」であり、「その本能からもっとも危険な仕方で逸れてしまった動物」である。[[2]](#endnote-2)

　ところで、デカルトは人間を「機械(machina)」とした。今日、人間に関して把握されていることもその程度のものである。それ以前には、人間は「或る高次の秩序からの持参金」として「自由意志」を与えられていた。今日ではその「意志」さえ取り上げられている。「意志」はもはや「働く」のではなく、「動かす」のでもない。以前は「人間の意識」、「精神」というものに「人間の高次の由来や神性の証明」が見られていた。すなわち、「人間を完成するため」には、亀のやり方にならって「感覚」を自己のうちへ引っ込め、「地上的なものとの交わり」を中止し、「死すべき覆い」を脱ぐ必要があると勧められたのである。そうすれば「純粋精神」が残ると言うのである。しかし、「精神」とは「有機体の相対的不完全性の徴候」であり、「純粋な愚劣」である。[[3]](#endnote-3)

**⒂　虚構の世界の捏造（『反キリスト者』の15）**

　道徳も宗教もキリスト教においてはいかなる点でも「現実(die Wirklichkeit)」に触れていない。というのは、キリスト教は次のような様々な観点から「純粋な虚構の世界(die reine Fiktions-Welt)」を作り上げているからである。すなわち、それは①「空想的原因」、②「空想的結果」、③「空想的存在者の間の交流」、④「空想的自然科学」、⑤「空想的心理学」、そして⑥「空想的目的論」である。この六つの観点は以下のようなキーワードによって押さえられ、説明される。すなわち、①は「神」、「魂」、「自我」、「精神」、「自由意志」、「不自由意志」であり、②は「罪」、「救い」、「恩寵」、「罰」、「罪の許し」であり、③は「神」、「聖霊」、「魂」であり、④は「人間中心的で、自然的原因の概念の完全な欠如」であると言われ、⑤は「悔い」、「良心の呵責」、「悪魔の誘惑」、「神の臨在」の助けを借りた「快あるいは不快の一般的感情の解釈」であり、⑥は「神の国」、「最後の審判」、「永遠の生命」である。これらのキーワードを核とする観点から作り上げられた「虚構の世界」は「現実」を「偽造し、無価値にし、否定する」。そして、「自然」という概念は「神の反対概念」とされ、「自然的」ということは「唾棄すべきもの」という言葉なった。したがって、「虚構の世界」は、その根を「自然的なものへの憎悪」のうちにもつのである。[[4]](#endnote-4)

1. Ibid., 13, S.179 [↑](#endnote-ref-1)
2. Ibid., 14, S.180 [↑](#endnote-ref-2)
3. Ibid., 14, S.180-181 [↑](#endnote-ref-3)
4. Ibid., 15, S.181-182 [↑](#endnote-ref-4)